

「ぎやははは！すげー！」

「おいおい、マジじゃねえか！」

「やだあゝ。ゝあはは♪」

「うわっ！きんもっ、こいつら！」

教室の前のドアから足を踏み入れるなり、クラスメイト達の遠慮ない罵声と笑い声が僕とお母さんに浴びせられた。

彼等彼女等の反応も致し方なかった。僕達は親子揃って一糸纏わぬすっぱんぽんにひん剥かれ、そのうえ後ろ手に手錠をはめられるという、とんでもない姿をしていたのだから。

お母さんが前を歩き、少し間をあけて僕がその後が続く。そして教卓を移動させて作られた、黒板前のスペースに並んで立つ。

席に着くクラスメイト達に体の正面を向けて。

隠すことなく、性器を丸出しにして…。

「はあ…ゴクッ」

「んん…あああん」

哀れな母子の口から漏れる、熱い吐息…。

「えー。では今からこの性のおもちゃ親子が皆様のご機嫌を伺うべく、最低変態羞恥芸を披露致します」

僕達の近くに司会者然として立つ、クラスメイトのタカシが言った。途端に沸きたつ教室内。

「あはは！いいぞ、やれやれー！」

「ぎやははははは！」

「やっぱあゝい♪あたしらなに見せられんのだよ、もう！」

「きひひ…ホント…とんでもない転落ぶりだな…」

誰かが何気なく口にした言葉が、僕の耳の中で儚く反響する。

とんでもない転落ぶり。

まさにその通りだった。ほんの数週間前までは、僕もお母さんも決してこんなことをさせられるような身分ではなかったのだ。

今日の前に居並ぶ一般庶民のクラスメイト達を、横柄に傲慢に見下ろす高みにいたのだ。

「はあ…ゴクッ」

それなのに、本当にどうしてこんなことになったのか…。

クラス全員の

性のおもちやに堕ちちゃった

超エリートお母さんと僕

（性格最悪大金持ち親子が

仲良く庶民のドMゴミ犬になって

クラス全員の前で

母子セックスショーさせられる話♪）

046

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

堂崎元氣（どうさき げんき）

主人公。大金持ちの家の一人息子。一般庶民のクラスメイト達を下に見ている。お母さんのことが大好き。

堂崎満代（どうさき みつよ）

元氣の母。四十五歳。プライドの高い金縁眼鏡のPTA会長。

堂崎典史（どうさき のりふみ）

元氣の父。一流企業の重役。

タカシ 元氣のクラスメイト。やんちゃ。ユー

ジ、ケンタとの三人組のリーダー的存在。

ユージ 元気のクラスメイト。眼鏡。小柄。ずる賢く、強か。パソコン関係が得意。

ケンタ 元気のクラスメイト。大柄なでくの坊。

風祭京子（かざまつり きょうこ）

元気のクラスメイトで、憧れの女性。
清楚なイメージ。サラサラ黒髪ロング
ヘアー。

「お待たせ、お母さん」

「ええ。…それじゃあ帰りますわよ、元気」

トイレから出て、待っていてくれたお母さんと合流する。今日は授業参観日だった。他の親子達がそうしているように、僕達も今から仲良く二人で帰路につくところだ。

いつも綺麗でお洒落なお母さんだけど、今日は一段と素敵に見えた。その気品溢れるクリム色のスカートスーツ姿は、一般庶民の野暮つたい母親達の中で、明らかに異彩を放っていた。

加えてライトブラウンに染められた鎖骨辺りまでのストレートヘアーはとても凛々しく、トレードマークの細めの金縁眼鏡はPTA会長としての威厳を遺憾なく主張してどこか神々しくさえある。眼鏡の下の切れ長の目も、鋭く細いあごも、息を飲むほどに美しい。

（はあ…お母さん…）

その美貌に、つい見惚れてしまう。

僕は、そんなお母さんのことが大好きだった
…。

「…ん、どうしたんですの、元気？お母さんの
顔をじろじろ見たりして」

「へ？いや、今日も綺麗だなあ…って思って」
「もう…バカなこと言っていないで早く行きま
すわよ？」

「はあ…い」

僕達は並んで廊下を歩きだした。しばらく行
った先の一画で、三人のお母さん達が立ち話を
していた。ついさっき授業が終わったばかりな
ので、そういう人も多いようだ。それぞれの息
子達は傍で待たされている感じだ。三人とも、
僕のクラスメイトだった。タカシ、ユージ、ケ
ンタの仲良し三人組。なんというか…非常に品

のない連中である。

「ああ、PTA会長さん。この前はお世話になりました」

前を通り過ぎる際、真ん中にいたタカシの母親に声をかけられた。仕方なく、僕とお母さんは足を止める。

「あら：どうも」

「いやあ、それにしてもいつもお綺麗ですよねえ？今日もなんか：すごくおめかしされて：ふふっ：いやあすごいですね：そのスーツ、すごくお高いんじゃない？」

「いえ：そんなことはありませんのよ。特別値が張るものでもございせんわ：」

「そうですか？でも私達庶民には到底手の届かない代物ですよ、きっと。ねえ二人とも？」

「ええ、ええ」

「ホント、会長さんすごいわあ」

「そんなことないですわ…普通ですわ、これくらい：」

お母さんは一般庶民との会話が億劫なのか、露骨に辟易した顔で相槌を打っていた。

タカシの母親は息子同様ガサツでデリカシイのない人のようで、お母さんのスーツに必要以上に顔を近づけ値踏みするようにじろじろと眺めていた。

少しムツとしつつ、僕は自然とタカシの母親の方の服に注目する。

彼女はどこか小汚いトレーナーとジーンズ姿だった。失礼ながら呆れてしまう。それが息子の授業参観に来てくる服なのか。いくらなんでもTPOというものがあるだろう。

というか、自分がこんなみすぼらしい格好をしているというのに、お母さんの高貴な服装に触れてくるその神経がわからなかった。見ると、

残りの二人の母親も似たり寄ったりの貧乏臭い身なりをしていた。

僕は思わず。

「…ぷっ」

と、吹きだしてしまふ。

「…こら、元気。笑うんじゃありませんの」

お母さんは小声で咎めつつ、僕の耳たぶを軽く引っ張った。

自分も、彼女達に対する嘲笑をちゃんと口元に貼りつけながら…。

「いてっ！」

「…じゃ、じゃあ私達は、これで失礼致しますわ」

気まづくなったので、お母さんは一礼だけして再び歩きだした。僕もついていく。

歩きながら、僕は振り返った。母親の隣に寄り添うようにして立つタカシの目を見る。そし

て彼を憐れむような苦笑を浮かべて。

(：君のお母さんの服……それなに(笑)？)

無言でメッセージを送った。タカシは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。いい気味だった。あいつはやたらちよっかいをかけてきたり、みんなの前で変に僕をいじったりするから、クラスの中で一番嫌いなのだ。

しばらく進んだところで、お母さんは言ってきた。

「：元気。いくら庶民相手とはいえ、あんな失礼な態度を取ってはいけませんわよ」

「えー。でもお母さんだって笑ってたじゃない？」

「あら：バレちゃってたんですの？ふふ：そりゃあ笑っちゃうでしょう？：なんであんなみっともない服装で、授業参観に来られるんでございましたよね？同じ母親として、お母さん

全く理解出来ませんわ…ふふ…うふふふ♪」
お母さんは堪え切れないといった様子で派手に思い出し笑いをした。きっと僕よりもずっと、あの母親達のことを内心で馬鹿にしているのだろう。

僕にはそれが、すごく嬉しかった…。

「…あの人達…お母さんの服の話題を向こうからだしてきたでしょう？…そんな風に不自然にまつりあげましてね、ちゃんと場に即した格好をしているお母さんの方を孤立させようっていう陰湿な魂胆なんですよ、あれは。庶民のいじめの常套手段ですの。正しいのはお母さんの方ですのにね…」

「え…そうだったの…うわ…ホント庶民って最低だね…」

僕はお母さんのその指摘に、怒りを禁じ得なかった。

「ええ：だから元氣も、あの子達と付き合っ
はいけませんことよ。息子達もきつと同じレベ
ルでございましょうから。薄汚い精神が伝染っ
てしまいますわ」

「勿論。あんな奴等友達でもなんでもないし。
安心して、お母さん」

僕は胸を張って堂々と答えた。

僕のお父さんは、誰もが知る一流企業の重役
だ。だから僕がこんな環境にいるのは、なにか
の間違いなのだ。

ああ。一刻も早くクソ庶民達のいない世界に
行きたい。

僕は心から願っていた…。

※※※

朝。僕達上流家庭の朝食はとても優雅だ。勿論低俗なテレビなんてつけない。代わりに静かな音で高尚なクラシックが流れている。メニューはオムレツ、ベーコン、クロワッサン、シーザーサラダ、オニオンスープに新鮮なアップルジュース…。どれもそれなりに高級な食材が使われたものばかり。タカシ達の家は、どうせご飯と味噌汁だけだろう(笑)?

「…母さん…ちょっとそこのドレッシング取ってくれるか?」

「……………」

「…母さん、ドレッシング」

「……………」

「…おい、母さんってば」

「…へ?あ…ど、どうかなされましたか、あなた?」

「いや。だからそのドレッシング、取ってほしいんだけど」

「ああ、ドレッシングですわね。はい、どうぞ」

「うん、ありがとう」

(……?)

ダイニングテーブルの向かいに座るお母さんの様子に、僕は首を傾げる。数週間前。授業参観が終わって少し経った頃くらいだろうか、その異変が始まったのは。なんだか今みたいに、心ここにあらずでボーッとしていることがやたら多い気がするのだ。なにか悩みでもあるのだろうか。

勿論心配だけど、悩み多き日常を過ごしているのは息子の僕とて同じだった。なんせ今日も下賤の庶民達で溢れ返る学校に行き、同じ教室で学ばなければならないのだから…。

毎日朝から気が重かった。

※※※

「…その時、彼は少女に言いました。『君は何故ここにいるんだい。ここにいる理由を教えてください』と。すると少女は彼に答えました…」

(……はあ)

授業中。先生にあてられ立って教科書を音読する彼女の姿に、僕はついうつとりしてしまう。やはりその声もまた、凜としていて非常に品がある。

風祭京子さん。僕の憧れの人だった。背中まで伸びたサラサラ黒髪ロングヘアーが特徴的な、清楚さ溢れる女性。顔面の造形もとてもお美しく、しょうもないクラスメイト達の中で唯

一僕と同じレベルの人間といってよかった。まさに掃き溜めに鶴。噂によると、やっぱり彼女の家もそれなりにお金持ちらしい。勿論僕の家ほどではないけれども…。

そしてどうも、彼女の方も少なからず僕のことを好いてくれているような節があるのだった。僕は女性に対してとても奥手なのでこちらから話しかけたことはなかったけれど、ふと目が合った時なんかには、彼女は優しくニッコリ微笑んでくれるのだ。それも一度や二度ではない。彼女もきつと、周囲の低劣な庶民達に嫌気が差しているのだろう。同じ階級の者同士、惹かれ合うのはある意味当然といえた。

（…風祭さん…ああ…好きだなあ…出来れば付き合いたいなあ…なんてね♪）

授業中だというのに、頭の中でどんどん妄想が膨らんでいく。仲良く手を繋いで街でデート

する二人。そして僕の家を訪れる風祭さん。僕は彼女を大好きなお母さんに紹介する…。

（ぐふ…ぐふふふ…）

いけない。ついよだれがでてしまった。

僕にとって彼女の存在は、学校でのただ一つの癒しだった。荒廃した砂漠に咲く一輪の花、それが風祭京子さん…。

彼女がいるから、こんな無益な学校生活も、なんとか耐え忍ぶことが出来たのだった…。

※※※

「…さてと」

帰りのホームルームが終わり、僕はさっさと家路につくことにする。こんな場所にもクラス

メイト達にも、なに一つ用はない。

ところが。

「おい、元気。ちよつといいか」

席を立ったところで、タカシに声をかけられたのだった。またいやがらせをされるのだろうか。本当に品性下劣で迷惑な奴だ。小柄眼鏡のユージと、大柄でくの坊のケンタも一緒だった。

「…なんだよ。僕もう帰るところなんだけど」

「いや、これからお前ん家にお邪魔しようと思つてな。いいだろ、今から三人で行っても？」

「はあ？ダメだよ、そんなの」

僕はイラツとした。なんでこんな下衆な庶民達を家にあげなきやいけないのだ。

「まあまあそう言わずに…とりあえず、ちよつとこれ見てくれ」

「!!!!!!」

タカシに突きつけられたスマホに写る画像

を見て、僕は本当に飛びあがりそうになってしまう。そして慌てて風祭さんの席を確認する。幸い彼女は既に、教室を出た後だった。

「はあ：ああ：」

僕の呼吸が否応なく乱れる。もう周りに他のクラスメイトの姿はなかったけど、一応声を潜め、例え遠くからでもスマホを見られることがないように充分に警戒したうえで、タカシは続ける。

「ふふ：バッチリ撮らせてもらったぜ：お前の秘密：いやあユージがな：お前は風祭に熱だからその線で見張ってたら絶対なんかあるって言うもんだからさあ：俺は半信半疑だったんだけどな：でもまさか本当にこんなことしてるなんてな：くく：お手柄だぜ、ユージ」
「にひひ。いえいえ」

狡猾な笑みを浮かべ、ユージはズレた眼鏡を

得意げにあげてみせた。

「ああ：はあ：」

（：終わった：もう完全に終わっちゃった：
僕の人生：）

目の前に掲げられたままのタカシのスマホを見つめ、僕は暗澹たる気分に包まれていた。そこには、隠し撮りされた僕の姿が写っていた。

風祭さんが、教室の彼女の席の横のところにいつもぶら下げている、可愛い袋に入ったペットボトル。

：その蓋を開け、飲み口の部分に、丸出しにした自らのチンポの先端をこすりつけている僕の姿が。

勿論、いけないことだとは重々わかっていても歪んだ欲求をどうしても抑え切れず、体育の授業の際や放課後なんかの教室に誰もいな

い時を見計らい、僕は幾度となくその行為を繰り返していた。

そして実際にそのペットボトルに風祭さんが口をつけるところを見て、僕のチンポに間接キスする彼女を見て、人知れず後ろ暗い興奮に打ち震えていたのだった…。

「ああ…んっ…はあ…」

唇のわななきが止まらない。

「ふふ…俺達のお願い…聞いてくれるよな、元氣？…お前の家に…お邪魔してもいいよな？」
「…ゴクッ」

僕は、頷くことしか出来なかった…。

※※※

「あ：あの：タカシ：くん：ちよつといいかな？」

四人で僕の家に向かう道すがら、僕は歩きながら口を開いた。

「ん、どうした元気？」

「：タカシくん：：ユージくんも：ケンタクんも：はあ：い：今までのこと：：ごめんなさい：その：僕：君達に色々失礼なことしちやってたと思う：はあ：特にタカシくんには：授業参観の日にも嫌な思いさせちゃって：本当に申し訳なく思っ：います：は：反省しています：」

「なはは！どうしたんだよ、元気！お前らしくないじゃないか！」

「いや：だからその：僕：もう心入れ替えるから：君達を馬鹿にするようなこと：今後決してしないから：ホント約束するから：だか

らその…今回の件…なんとか許してもらえませんか？」

秘密を暴かれすっかり打ちのめされてしまった僕は、か細い声ですがりつくように彼等に言っていた。我ながら情けないほど下手に出ていたが、背に腹は代えられない。

「ふふ…うゝん。どうしょつかなく」

「あ、あの…お金…お金でどう?…お金あげるから…数十万とか…いや…百万円くらいなら…なんとかするから…どうか今回のこと…黙っててくれませんか?…はあ…特にお母さんには絶対に知られたくないんだ…僕…ね?…お金欲しいでしょ、三人とも?ね?ね?ね?」

「あはは。…元気」

タカシは足を止め、顔を近づけ僕の目をグッと覗き込んだ。そして凄みを利かせた静かな声で言った。

「…だあゝめ。…いくら積まれたって、絶対に許してやんねえ」

思わず背筋が凍りつく、鬼のように恐ろしい形相になって…。

「ぐっ…」

やはり彼は根に持っていたのだ。これまでの彼等を見下した僕の横柄な態度。そして母親を馬鹿にされた、授業参観の日のあの僕の振る舞いを…。

「…勘違いすんなよ、元気？俺達が学校や風祭に打ち明ければ、本来は警察沙汰になる話なんだぞ、この件は。それをあえてそうせず、俺達だけの内輪で済ませてやろうって言ってるんだぜ？俺達はとっても親切なんだよ。そうだな、ユージ、ケンタ？」

「うんうん」

「ぐふ。そうそう」

「ふふ。だからせいぜい俺達に感謝して、諦めて言いなりになるんだな。…大丈夫。警察に突きだしたりなんてしねえよ。そんなことしちまったらせつかくの楽しみが奪われてなんも面白くねえからな。なははは！でもお前が俺達に逆らうつもりなら、勿論その限りではないぜ。…わかってるよな？」

「くっ…」

僕達は再び歩きだした。僕はこの三人に、もう完全に支配されているのだった。人生を棒に振りたくなければ、彼等に従う以外に道はない…。

今後僕はどうなってしまうのか。本当に絶望的だった。まるで明るい未来は見通せない。地獄が待っているとしたか思えない。でも直近の問題は、とりあえずお母さんだった。このまま家に辿りつけば、お母さんに僕の秘密を知られて

しまう。彼等は容赦なくそれを告げるはずだった。きつとそのために、僕の家に行きたがっているに違いないのだから。

でも僕はそれだけは避けたかった。僕の大好きなお母さん。美しく高潔で、僕が誰より尊敬するお母さん。彼女は僕の悪事を知ったらどう思うだろうか。それもよりによって、クラスメイトの女子のペットボトルの飲み口に、チンポをこすりつけていたなんて知ったら。息子がそんな変態なことをしていたと知ったら。その画像を直接見せられたら。

「はあ：ゴクッ」

優秀な僕は、お母さんからそれなりの評価を得ているはずだった。でもその評価は一瞬で碎け散り、死ぬほど軽蔑されることだろう。死ぬほど失望させてしまうだろう。もう二度と口をきいてもらえないかもしれない。本当に勘当さ

れるかもしれない。

（ああ…そんなの嫌だ…お母さんに嫌われるなんて…もう絶対嫌だ…）

僕は身を切られるほどに懊悩していた。胃が締めつけられ、今にも嘔吐しそうだった。だが良いアイデアは思い浮かばず、残酷にもあつという間に我が家の前に到着してしまう。

「…はあ…タカシくん…本当にごめんなさい…だからどうか考え直してくれませんか…お、お母さんに言うのだけは…何卒…」

もうなす術なく、彼等の行く手を塞ぐように立って涙目でひたすら懇願する。

「ふふふ…だあゝめ♪」

だがタカシは聞き入れてくれず、僕を押しつけて玄関ドアに手をかけたのだった。

「どうも…こんにちは…！おばさ…ん！」

そそくさと玄関に入り、彼は家の中に向かっ

て大声で呼びかけた。ユージとケンタも、既に玄関の中だ。僕も仕方なく、彼等が続いた。

「…は、はあゝい」

中からお母さんが出てきた。僕は思わず下を向く。

「こんにちは、おばさん」

「あ…ど…どうも…いらっしやいませですわ」

「あがつていい？」

「ええ…いいですわよ…どうぞ」

「にひひ。じゃあお邪魔しまあゝす」

「ふふ。お邪魔しますよ」

「ぬふっ」

三人はなんら遠慮することなく、雑に靴を脱ぎ散らかして僕の家にあがった。下品な庶民らしいガサツさに、正直嫌気が差す。

お母さんに先導される形で、僕達はリビングに向かう。最後尾で小さくなつて震えながら、

僕はある違和感に苛まれていた。お母さんは、僕がタカシ達を連れてきたことに対して、特に驚いたような素振りを見せなかったのだ。むしろそれを充分予期していた風だった。僕同様庶民である彼等を毛嫌いし、付き合うなとまで言っていたはずなのに。

これは一体、どういうことなのだろう…。

「…：？」

三人は、リビングの高級ソファーに投げ捨てるように鞆を置いた。僕もそれに倣って鞆をおろす。すると、これからどんな目に合わされるのかと戦々恐々とする僕の方を見て、タカシは改まった口調で言ってきたのだった。

「…：元気、お前には黙ってたんだけどな。…：実は俺にも秘密があるんだよ」

「え…：」

「なんだと思う？」

「いや…ごめん…ちょっとわからない」

「うん。実は俺…超能力が使えるんだ」

「へ？」

素っ頓狂なその言葉に、拍子抜けしてしまう。
でも彼の目は至って真剣だった。続ける。

「まあ、一種類だけだけどな。でもそれがとんでもない力なんだ」

「はあ…」

「なんとな…女を意のままに操る超能力なんだ。俺がその力を使えばな、どんな女でも、体を自由に動かすことが出来ちまうんだよ」

「…ゴクッ」

僕の全身が、急激に冷たくなっていく。

なんだ？

なにを言っているんだ、こいつは？

「ふふ…嘘だと思うだろ？そんなのあるわけないって？でも嘘じゃないんだな、これが。…」

「試しにお前の母親に使ってやるよ」

「なっ！！！！」

「では元気のお母さんっ！今すぐ服脱いで！すっぽんぽんになあれ！はいっ！！！」

タカシは両手を前方にそれっぽく突きだし、
て大仰に構え、わざとらしく力を込めるようにな
仕草をしてみせた。

すると、お母さんは…。

「あゝあゝれれゝゝこゝこゝこれは一体どういうことでしょうゝ？ゝゝはあゝゝゴクツゝゝじ、自分の意思とは裏腹にゝゝか、体が勝手に動いちゃいますわあゝ」

「!!!!!!!!!!!!!!」

信じられない光景が、僕の目の前で展開された……。

思わず寒気を催すような芝居がかった気味悪い口調で言ったお母さんは、驚くべきことに